

対話型アセスメントツール（居場所曼荼羅）の開発 —居場所の構成要素抽出と療養環境への示唆—

東野 友子^{1)*} 船山 哲郎²⁾ 菊地 ひろみ³⁾ 上田 裕文⁴⁾

¹⁾ 札幌保健医療大学保健医療学部看護学科 ²⁾ 札幌市立大学大学院デザイン研究科博士後期課程

³⁾ 札幌市立大学大学院看護学研究科 ⁴⁾ 北海道大学観光学高等研究センター

抄録：本研究は、療養環境に必要な居場所とは何かを探る事を最終目的とし、抽象的概念を可視化するデザイン学的な手法を用い、より具体的な「居場所」の構成要素を探るためのツールを開発し健康人を対象に試用した。人の居場所を構成する要素を調べるために、抽象的な概念を図式化するためのマインドマップと、構成している要素を探るためのレパトリートグリッド発展手法を用いてツールの開発を行った。開発したツールを用いて、健康な20歳代から70歳代以降の男性26名、女性32名の計58名を対象とし、平成26年8月から9月に調査した。結果は「パーソナルスペース」における「家の中など個人の空間や日常生活環境」「家族との触れ合い」や「その他落ち着く環境」の3要因、「ソーシャルスペース」における「趣味活動」「社会的交流」や「社会的環境」の3要因、「ネガティブな感情からの離脱」の計7要因に集約された。本結果より対象にとっての居場所とはプライバシーを保ち心身共にリラックスでき、人との交流を通して自己の存在価値が見出される場所と示された。療養環境はこれらと同様な環境が望ましいと考えられた。また、療養者及び介護者の両者にとって心地よい療養環境となるよう、発達段階に応じた環境の調整も必要であると考えられた。開発したツールは15分～20分程度ででき簡便であると考えられる。しかし、質問項目に解釈が難しい部分があるため、より明解な提示方法を検討する。

キーワード：居場所，療養環境，ツール開発

Development of interactive assessment tools “Whereabouts Mandala”: Extraction of constituent elements of place of residence in general adults and suggestion to medical environment

Tomoko Higashino¹⁾, Tetsurou Funayama²⁾, Hiromi Kikuchi³⁾, Hirofumi Ueda⁴⁾

¹⁾ School of Nursing Sapporo University of Health Sciences

²⁾ Graduate student Graduate School of Design Sapporo City University

³⁾ Graduate School of Nursing Sapporo City University

⁴⁾ Hokkaido University Center for Advanced Tourist Studies

Abstract: This study aimed to develop a tool for identifying components associated with a “place to stay” by using a design-based visualizing method, and to clarify the desirable environment for medical treatment. To examine the components of a place to stay, we combined “mind map” and “evaluation grid method” to depict abstract imagery. The study was performed from August to September 2014 in 58 healthy subjects (male: 26, female: 32) in their 20s to 70s or older. The results were classified into 7 categories: “private space or daily living environment such as home,” “communication with family,” and “other comfortable environments” as “personal space”; “hobby activity,” “social communication,” and “social environment” as “social space”; and “withdrawal from negative feelings”. The place to stay should be a place where a person can maintain privacy, have mental and physical relaxation, and find

* 札幌市立大学大学院看護学研究科博士前期課程在籍時の研究による論文

the meaning of his/her life through communication with others. A desirable environment for medical treatment would have similar characteristics. In addition, the environment should be adjusted according to the developmental stage, so that both persons who need care and caregivers can feel comfortable. The new method is simple, which takes only 15 to 20 minutes to complete the questionnaire. However, some questions are still difficult to understand, and need to be improved with clearer expressions in the questionnaire.

This study was performed after obtaining approval from the ethical committee.

Keywords: Place to stay, Desirable environment for medical treatment, Develop a tool

1. 緒言

看護師にとっての療養環境は、光・空気・清潔なリネンが最低必要とされ、人に対して考慮すべき環境であるというナイチンゲール¹⁾の教えが基盤となっている。これは、看護基礎教育において大切とされている。そして、療養環境については看護学のみならず建築学領域においても多くの研究が行われてきた。さらに、療養環境に関する評価では、物理的評価および人的環境要素に心理面も含むことが明らかとなった²⁾。具体的には、「療養上良い」、「安全」、「安心」、「リラックスする」などである。渡邊らは、「入院の目的は病気の治療であり、療養の場はその目的を達成しながら生活をする場である³⁾」と述べている。療養環境を考える上では、生活の場であるということも念頭に置いて考える必要がある。

平成22年の厚生労働省の終末期の療養場所に関する調査³⁾によれば、一般市民の63.3%が「自宅で療養したい」と回答し、平成24年の内閣府の調査⁴⁾でも一般市民の54.4%が「終末期を自宅で迎えたい」と回答している。また、平成22年度の内閣府の介護を受けた居場所に関する調査⁵⁾によれば、介護が必要になった時の介護を受ける場所として、男性の44.7%、女性の31.1%が「自宅で介護してほしい」と回答し、男女共最も高い割合を占めている。

人はなぜ病院での療養より自宅を望むのであろうか。それは、病院は自宅と違って自分の居場所ではないからだろうか。

居場所に関する文部科学省での定義によると、「居場所とは、存在感を実感することができ、精神的に安心することができる場所、さらに安心して身を置くことができる場所^{6) 7)}」とされている。しかし、人によって「居場所」は様々であり、患者にとっての居場所がどのようなものから構成されているのか具体的な要素については明らかにされていない。また、「居場所」に対して、人々が思い描くイメージや構成する要素が異なる事は容易に想像できるが、それらを具

体的に抽出する方法については先行研究に見当たらない。そこで人が考える「居場所」とはどのようなところを示し、どのようなもので構成されているのかを探り、療養環境に必要な要素を検討するためのツール開発を着想した。

以上より、本研究は、抽象的概念を可視化するデザイン学的手法を用い、個人のより具体的な「居場所」の要素を探るためのツールを開発し、療養環境に必要な「居場所」とは何かを探ることを目的とした。

この研究により、長期療養や入院・在宅介護に入る前の段階の患者に対して、個人によって異なる長期療養期間の望ましい環境や過ごし方に必要な要件を、把握することが可能となる。

2. 研究方法

1) 手法の説明

対話型アセスメントツール「居場所曼荼羅」(以下アセスメントツール)の開発にあたっては、抽象的な印象や感情を構成している要素を探るためのレパトリートリーグリッド発展手法と抽象的な概念を図式化するためのマインドマップの手法を参照した。2つの手法の概要を以下に述べる。

(1) レパトリートリーグリッド発展手法

レパトリートリーグリッド発展手法は1986年に讃井ら⁸⁾によって開発されたインタビュー手法であり、環境心理における定性調査発達の端緒となったものである。その手順を以下に示す。

① 評価対象の選定

研究対象環境のさまざまなバリエーションを相互に比較できるような形式で表現した評価対象を選定する図面、被験者のよく知っている環境をカードにメモさせたもの(この場合、被験者のそれぞれの環境についての記憶が評価対象となる)等を評価対象とすることも可能である。

② オリジナル評価項目の抽出

すべての評価対象を提示しこれらを総合評価という観点から5段階に評価・分類させる。次に異なった評価をされた評価対象群を被験者の前に提示し、それぞれについて次のような教示を与え、評価項目を被験者自身の言葉によって抽出し記録する。「これらの〇〇よりもこちらの〇〇の方がより好ましいということですが、そう判断された理由のうち、あなたにとって重要なものをどんなものでもかまいませんので、思い付くまま1つずつ言ってください。なお、これらのうち特定のものにだけあてはまる理由でもかまいません」

被験者が新しい評価項目を容易に見いだせなくなった場合は、次の組み合わせに移る。最後に最も高く評価された評価対象群についての不満を聞くことにより評価項目の補完を行う。

③ 関連評価項目の抽出（ラダーリング）

・ラダーアップ：上位項目（理由）の抽出

「あなたにとって〇〇だとなぜ良いのですか」

・ラダーダウン：下位項目（条件や具体例）の抽出

「あなたにとって何がどうなっていると〇〇ですか」

調査結果は、「窓が大きい－小さい」「天井が高い－低い」といった客観的・具体的な項目を下位に、「開放感がある－ない」といった感覚的理解を中位に、さらに「快適な生活が送れる－送れない」といった、より抽象的な価値判断を上位に持つ、階層的なネットワーク図としてまとめることができる。

(2) マインドマップ

マインドマップとは、イギリスの教育専門家であるトニー・ブザンが提唱した思考ツールで、人間の記憶構造に関する研究成果に基づき、複雑な概念を分かりやすく図式化することを中心とした手法である。ブザンによれば、人間の脳は放射思考をする⁹⁾という。放射思考とは、中心点から外側に向けて広がっていく連想的な思考過程を意味する。マインドマップは、中心となる概念から連想されるキーワードやイメージを放射状に広げ、一つの中心概念に結合されるすべてのキーワードやイメージから、新たな連想を起こしていくというプロセスを踏みつつ、連想された言葉に対しても、さらにそこから連想を広げていくのである。マインドマップは学習者に興味をもたらし、日常生活の中でも比較的簡単に用いることができるため、ビジネスのプレゼンテーションや多様な会議等で広く用いられている¹⁰⁾。高橋の研究¹¹⁾によると、マインドマップには、「物事をまとめること」「考えを明確にすること」「物事の全体像を把握すること」「物事の細部を把握すること」「時間を有効に使うこと」「効率的に作業をすること」といった効果が確認されるという。

2) アセスメントツールの開発過程

(1) 試作

① 人の居場所を構成する要素は何かを調べるツールの開発として、抽象的な概念を図式化するためのマインドマップと、抽象的な印象や感情を構成している要素を探るためのレパトリートリーグリッド発展手法を用いた。抽象的な概念でありながらも実際に存在する空間である「居場所」というものの構成要素を把握する上で、概念を空間的な図として記述するマインドマップと、印象や感情を階層的に理解していくレパトリートリーグリッド発展手法を組み合わせることは妥当であると考えた。

ツールの開発に際して、以下の点に留意した。

- i) 「居場所」という抽象的な概念を理解していくために、マインドマップの手法を基本とする。
 - ii) 「居場所」を構成していく具体的要素を探るために、ラダーダウンを行っていく。
 - iii) レパトリートリーグリッド発展法の要領で階層化を行うことで潜在的なニーズを引き出すようにする。
- ② 質問の仕方やどのような方法で行うのが良いかについて、試作し検討した。

試作段階で検討したこととして、以下の点があげられる。

- i) 質問項目は統一するのか、あるいは質問者に委ねるのか。
- ii) 調査に必要な所要時間はどのくらいか。
- iii) 居場所だと感じている場所そのものを回答する必要性はあるのか。
- iv) 最終的に具体的要素にたどり着くにはどういった質問が有効なのか。
- v) アセスメントツールはどういった様式が適切か。

③ アセスメントツールの作成に当たっては、第一に調査者にとって使いやすいこと。第二に被験者にとって分かりやすいこと。そして第三に被験者のニーズを明らかにできるという実施効果があるということ。この3つの観点から課題解決に向けて設計に取り組んだ。具体的には以下の点について留意した。

- i) A3～A4サイズ3枚程度の用紙で実施できる。
- ii) 実施時間は概ね15分程度と短時間で簡便に実施できる。
- iii) 特殊な計測機器や計算、専門的な技能・知識がなくても実施できる。

④ アセスメントツールの構成

アセスメントツールは記入用紙と質問項目から成る。調査者が質問し、被験者がその質問を受けて調査記入用紙に記入する対話を通じて被験者のニー

ズを明らかにする．試作した様式を以下に示す．

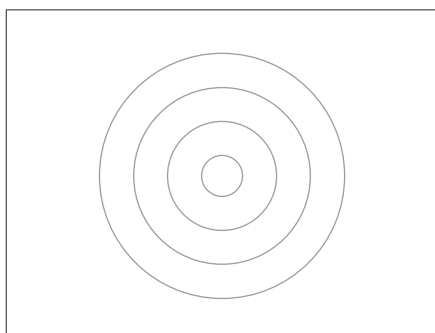


図1 プレテスト用記入用紙

記入用紙は横使いのA4用紙に4つの同心円を描いた単純なものとした．Adobe Illustrator CS5®を使用してデータを作成した．円は太さ0.5ptの線で描画し，線の色はCMYKカラーでグレー(C0/M0/Y0/K45)とした．記入用紙を量産することも視野に入れ，入手が容易なA4サイズを採用した．同心円に関しては手書きの円を用いる案や白紙の用紙に回答者自身が円を記入していくという案も考えられたが，回答者の負担を減らしつつ，できる限り同じ条件で回答を記入してもらうために，あらかじめ同心円が記入された用紙をプリントアウトして使用することとした．

記入用紙は，同心円から中心に自分を置き，そこから階層的に放射状に記載する構成となっている．被験者が描いた幾何学的な記載や描画が，研究者に仏教における「曼荼羅」を連想させた．「曼荼羅」とはサンスクリット語のマンダラを漢字表記したものであり，「本質を得る」という語源からなり円をなすものである¹²⁾．ユングの心理学によると，意識の中心に自我があり，意識と無意識の中心に自己があるとし，自己の象徴的表現とマンダラが一致する¹³⁾．すなわち，心の内部から統合へこのマンダラ全体が自己を示す．したがって，本アセスメントツールは対象者の居場所に対する潜在的な意識を探るということから，「居場所曼荼羅」と命名した．

表1. プレテスト用質問項目

i. 真ん中の円に「自分」を書いて下さい．
ii. 世の中にある「自分の居場所」を思い浮かべて下さい．
iii. その居場所にいるときに感じる事を書いて下さい．気持ちや感情等，何でも結構です．
iv. iiiで書いた事について，どんなとき，もしくは状況でそれを感じるのか書いて下さい．

v. ivで書いた状況にいるときに自分の周りにあるもの，その状況を作っているものを具体的に書いて下さい．

vi. vで書いたものについて，それらのものがどういう状態にあると望ましいか書いて下さい．

質問者や調査ごとに調査時間や調査結果に差異が生じないように質問項目を統一した．具体的な居場所を記入してもらうことはせず，中心の円に「自分」を記入してもらうこととした．中心の円から順に外側に記入を進めるよう誘導し，被験者にとっての居場所を構成する要素を明らかにしていく構成とした．

(2) プレテスト

(1) で作成した様式を用いてプレテストを2回行った．健康な20歳代から70歳代以降の男女43名に対してプレテストを行った．調査は，被験者が1人であってもグループであっても良いこととした．プレテストの結果得られた内容を以下に示す．

- ①調査の所要時間は平均して一組あたり15分程度．大きな個人差は無かった．
- ②質問項目がわかりづらい，何を書いて良いかわからないという意見があった．
- ③記入用紙について，どこから書いていったら良いかわからないという意見があった．
- ④主に高齢者から，記入用紙の同心円が見えないという意見があった．
- ⑤記入された内容については，複数の意味に解釈できる回答も見られた．
- ⑥回答する単語の量には個人差が見られた．
- ⑦個人差はあるが，個人よりも複数人に対して調査を実施した場合の方がスムーズに回答を記入できる被験者が多かった．

(3) アセスメントツールの開発

プレテストで得られた結果や感想を元に改良を加え，アセスメントツールを開発した．主な改良点を以下に示す．

- ①質問項目をより説明的にすることで理解しやすいものにした．
- ②何に関する調査なのかを記入を始める前にもう一度口頭で説明することで，「何を回答したら良いのか」を明確にした．
- ③質問が進むごとに一つずつ外側の円に記入するという説明を加えた．
- ④記入用紙の同心円の線の色を濃くし，高齢者でも見やすいものとした．
- ⑤記入用紙の同心円に番号を割り当てることで，どう

いった順番で回答を記入していくのかを解りやすくした。
⑥年代や性別による「居場所」の差を分析するために、性別や年代に関する質問項目を新たに設けた。

以上の改良を加え、アセスメントツール「居場所曼荼羅」作成した。提案した様式を以下に示す。

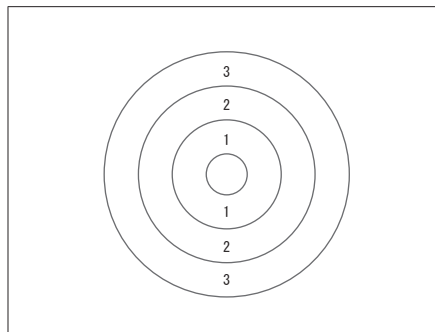


図2 「居場所曼荼羅」記入用紙

記入用紙は、プレテストの様式の同心円に内側から順に番号を割り当てたものとした。質問が進むごとに記入する円の番号が進んでいくことで被験者がよりスムーズに回答を記入することができる。Adobe Illustrator CS5®を使用してデータを作成した。円は太さ0.5ptの線で描画し、線の色はCMYKカラーでプレテスト時の様式で使用した色よりも濃いグレー(C0/M0/Y0/K70)とした。番号は堅苦しい印象を与えないよう丸みのあるフォントを用いた。また、高齢者にも見やすい太い文字が良いと考えDF太丸ゴシック縁取りを採用し、文字の大きさは30ptで記入した。番号の主張が強くなりすぎないよう文字の色はCMYKカラーで薄いグレー(C0/M0/Y0/K35)とした。

表2. 「居場所曼荼羅」質問項目

i. 真ん中の円に「自分」と書いて下さい。
ii. これからいくつかの質問に対して答えを回答用紙に書いていってもらいます。質問が進む毎に、1つ外側の円に回答を記入していき下さい。
iii. このアンケートでは、「居場所」について聞いていきたいと思っています。世の中に「自分の居場所」がいくつかあると思います。まず、その自分の居場所を思い浮かべて下さい。
iv. 1つ目の質問です。その居場所にいるときはどんな感じですか。その感情や気持ちを1番の円に書いて下さい。
v. 2つ目の質問です。今書いたことについてお聞きします。それはどのような状況または、状態でそのような感情や気持ちになりますか。それぞれのところから線を引いて2番の円に書いて下さい。

vi. 3つ目の質問です。今書いたことについてさらにお聞きします。その状況・状態にあるときに自分の周りにあるもの、その状況を作っているものは何ですか。線を引き、3番の円に具体的に書いて下さい。
vii. 最後の質問です。今書いたことについて、それらがどのような状態・状況にあると望ましいと考えるか3番の円の外側に書いて下さい。

質問項目は、以上に示す7項目とした。より説明的な文章にし、何に関する記入調査なのかを冒頭で説明することにより、被験者がより回答しやすいものとなった。また、その他に被験者の属性に関する質問は、1.「男性か女性か(2択)」、2.「20歳代から70歳代以上までの年齢層(6段階)」、3.「職業(9種類)」とした。i～viの質問項目でラダーダウンを行い、「居場所」を構成する要素を具体的に明らかにしていく、viiで望ましい状態を聞くことでラダーアップを行い、よりの確にニーズを把握できると考えた。

3) 調査方法

(1) 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

(2) 研究期間

研究期間 平成26年4月から12月

調査期間 平成26年8月から9月

(3) 対象者

層別サンプリング法とし、健康な20歳代から70歳代以降まで、各年代の男性と女性それぞれ5名程度ずつ、合計60名とした。

対象者の選定は、地域性を考慮し札幌市に居住するものとした。まちづくりセンターの職員を通じて対象者となる人を無償で依頼した。また、対象者や研究者の知人を介してネットワークサンプリングとした。

(4) 調査の手順

①開発されたアセスメントツールを用いて、対象者の学校、研究者の職場、老人クラブの集会場などで調査した。

②対象者数人に対して調査者1名で対応し、質問項目に沿って記入用紙に記入するように説明し実施した。

(5) 分析方法

円の1から円の3および円の外側にそれぞれ記された事項に関して、円1に記載された「居場所にいるときの感情」、円2に記載された「居場所とその状況」、円3に記載された「居場所を構成する要素」について、それぞれ類似した言葉を集約し、カテゴリー化した。そのため、ベレルソン¹⁴⁾の内容分析を基に分析した。

また、円の1から円の3に記載された内容を各年代別に分類し、どのような傾向があるのか分析を行った。

本研究の分析にあたり、研究メンバーによる検討とメンバーチェック、さらに質的研究を専門とする教員のスーパーバイズを受け実施した。

(6) 倫理的配慮

本研究は札幌市立大学大学院デザイン研究科倫理審査会の承認を得て行った。記入用紙は無記名とし、個人が特定されないように番号処理すること、参加は自由であり途中棄権しても不利益は生じないことを書面と口頭で説明し、口頭で同意を得た。

3. 結果

1) 対象者の概要

健康な20歳代から70歳代以降の男女63名に実施した。このうち5名が途中棄権し、最終的に男性26名、女性32名の計58名のデータを収集した。(表3参照)

対象者の属性は、20歳代が殆ど学生、30歳代から50歳代がアルバイトを含む就労者、60歳代がアルバイト生活者、70歳代以降が主婦あるいは無職であった。

調査時間は最短5分、最長30分、平均14.13分であった。年代が上がるにつれて回答に要する時間は長くなる傾向にあった。回答に時間を要した対象者は、「質問の意味はわかるが、何を書いて良いのかわからない」という意見が多かった。また、回答を棄権した被験者のほとんどが60歳代以上で、「想像できない」「何を書いて良いのかわからない」という理由での棄権だった。

表3. 対象者内訳

	男性	女性	合計
20歳代	6	7	13
30歳代	5	6	11
40歳代	5	6	11
50歳代	5	3	8
60歳代	3	3	6
70歳代以上 (途中棄権者)	2	7	9 (5)
合計	26	32	58 (63)

2) 居場所を示す項目数

被験者が自身の居場所として回答した項目で、円の中心の「自分」に最も近い円の1では、最小1個、最大9個で平均は3.5個/1人であった。円の1の外側の円の2では、最小1個、最大12個で平均は4.0個

/1人であった。もっとも外側の円の3では、最小1個、最大24個で平均は5.8個/1人であった。円の外側に関しては、最小0個、最大19個で平均は4.1個/1人であった。回答した項目数は年代や性別に差はなかった。

3) 居場所の要素とその状況

居場所にいる時の状況は大きく「パーソナルスペース」「ソーシャルスペース」「ネガティブな感情からの離脱」の3つのカテゴリに整理された。「パーソナルスペース」では、「家の中など個人の空間や日常生活環境」「家族との触れ合い」や「その他落ち着く環境」の3要因に集約された。「ソーシャルスペース」では「趣味活動」「社会的交流」や「社会的環境」の3要因に集約された。そして、「ネガティブな感情からの離脱」の1カテゴリ1要因を合わせ計7要因に集約された。

(1) パーソナルスペース

①「家の中など個人の空間や日常生活環境」

「家の中など個人の空間や日常生活環境」では、「家(実家や自室を含む)にいる」「リビングやソファ」「テレビを見ている」「本や新聞を読む」「食事」「入浴する」「ベッドや布団の中」など「パーソナルスペース」のものが多く、“安らぎ”“落ち着く”“安心”“寛く”という感情で表されていた。また「食事」に関するものは、「家族との団らん」や「お酒を飲む」なども含み、“楽しい”や“満足”という感情でも表されていた。

②「家族との触れ合い」

「家族との触れ合い」では、「親」「孫や子供」「ペットとの触れ合い」あるいは「団らん」を表し、①同様の“安らぎ”“安楽”，という感情のほかにも“愛情”“幸せ”という感情で表されていた。

③「その他落ち着く環境」

「その他落ち着く環境」では、「リラックスできる自分の居場所」と記載され、「好きなものに囲まれている」「自分自身が楽」であり、「好きな事を行い普段の自分ではいられない場所」としていた。さらに落ち着く環境には「自然の環境」もあり、「散歩」「外で読書」「窓の外」という場所も記載されていた。ここでの感情は、“落ち着く”“安らぎ”“心地よい”という言葉で表されていた。環境とは別ではあるが、好きなものの一つに「お菓子」「たばこ」といった嗜好品もあった。

(2) ソーシャルスペース

①「趣味活動」

「趣味活動」では、「登山」「釣り」「プール」「ジョ

ギング」「車」「球技の観戦」「休日の外出」などがあり、個人で出来るものもあるが、誰かと取り組むものもある。ここでは、“楽しい”“わくわく”“快適”という感情で表されていた。

② 「社会的交流」

「社会的交流」では、「友人や知人と過ごす」「話す」などが多く、“楽しい”“ゆったり”“ホッとする”という感情で表されていた。また、自分のことを理解してくれる人との交流では自己肯定感という感情であった。

③ 「社会的環境」

「社会的環境」は、対象者の背景にもよるが、学校と職場に大別された。ここでは、“楽しい”“ヤル気”“充実感”という感情の反面、“不安”“緊張”“恐れ”という感情で表されていた。

(3) 「ネガティブな感情からの離脱」

「ネガティブな感情からの離脱」は、仕事から帰宅した時の状況を表していた。「何もしなくて良い」「朝起きなくて良い」「一日終わってやれやれ」というような、緊張が解き放たれた状況を示し、“落ち着く”“安らぎ”“ホッとする”“のんびり”という感情で表されていた。(図3参照)

4) 年代別居場所の傾向

年代別でみた居場所の傾向として20代では、男女ともに「自宅や自室のソファやベッド(座っている・寝ている)」、「個人的な趣味や休息時間」を居場所としていた。また「家族との交流や団らん」、「友人との交流」を居場所とする人もいた。他に、「自家用車やカフェ」、「学校」を居場所としている人もいた。ただし、働いている人は職場を居場所とする人もいた。

30歳代では、「自宅や自室」などプライベートなスペースをあげ、同時に「仕事や職場環境」をあげていた。家庭や家族、部屋の情景等の対象が具体化し、さらに喫茶店や居酒屋などをあげる人もいた。

40歳代では、自宅や職場の他に、「家族や家庭」・「子どもとの交流」や「家族との団らん」を居場所としていた。さらに映画館など趣味活動の記載がみられた。健康への気遣いも見られた。

50歳代では、趣味や趣向を体調管理と共にアクティブに取り組み出す内容であった。仕事や職場の記載が少なくなり、山、川、自然の中、ジョギングやプールなど趣味活動や個人的な快適性を居場所としていた。

60歳代および70歳代以降では、仕事や職場の記載はなくなり、自宅や自分の時間に加え、孫や家族との交流や趣味のサークル活動などを記載していた。死や自身の寿命を意識した記載が見られた。(表4参照)

4. 考察

1) 居場所の構成要素

「パーソナルスペース」においては、自宅や家を居場所としリラックス、安らぐ場所としていた。日常当たり前のようにある「テレビ」「テーブル」「ソファ」が要素と考えられる。さらに、個人の安らぐ場所として「入浴する」「コタツ」「寝転がる場所」として「床やソファ、ベッド」をあげていた。やはりリラックスできる安らぐ場所は、個人の空間であり見慣れたものがあり、自宅あるいは自室である事が多いと考えられた。さらに、「その他落ち着く場所」に記載があるように「自分の好きなものに囲まれた環境」「見慣れた場所」「飾らない自分でいられる場所」を落ち着く環境とし、「自分自身が自分らしくいられる場所」を居場所としている傾向にあると考えられた。パーソナルスペースにおいても「家族との団らん」を要素にあげているように、個人ではなく家族との絆を確認することが居場所として大切であるといえる。

一方、パーソナルスペースでは、「TVやゲーム」などのような個人の趣味として活動している場所を居場所としており、“楽しい”や“快適”といった感情で表されていた。自宅外の「自然の中」や「プール」「イベント会場」「ドライブ中」など個人が好んで楽しむことを行なっている場所は、活動している時が生きている実感を持てるものでもある事から居場所としていたと考えられる。また、「友人との会話」などは、パーソナルスペースで家族などと過ごしているときに居場所としていたものと同等と考えられる。さらに、活動も一人の場合と誰かと一緒の場合もあると推察され、いずれも自分の存在を実感出来る場所であると考えられる。仕事場において“やる気”“自己肯定感”のように、辛いと感じる場所であっても自己の存在する場所であることがわかる。パーソナルスペースでの居場所における感情は、仕事場における“緊張感”や“不安”感情と対比し、より強化することに繋がると考える。

以上のことより、人が居場所と感じているところは、心身共にリラックスでき、自己の存在価値が見いだされる場所であると考えられる。これは文部科学省が「居場所とは、存在感を実感することができ、精神的に安心することが出来る場所。さらに、安心して身を置くことのできる場所」と述べていることと一致する結果であると考えられる。

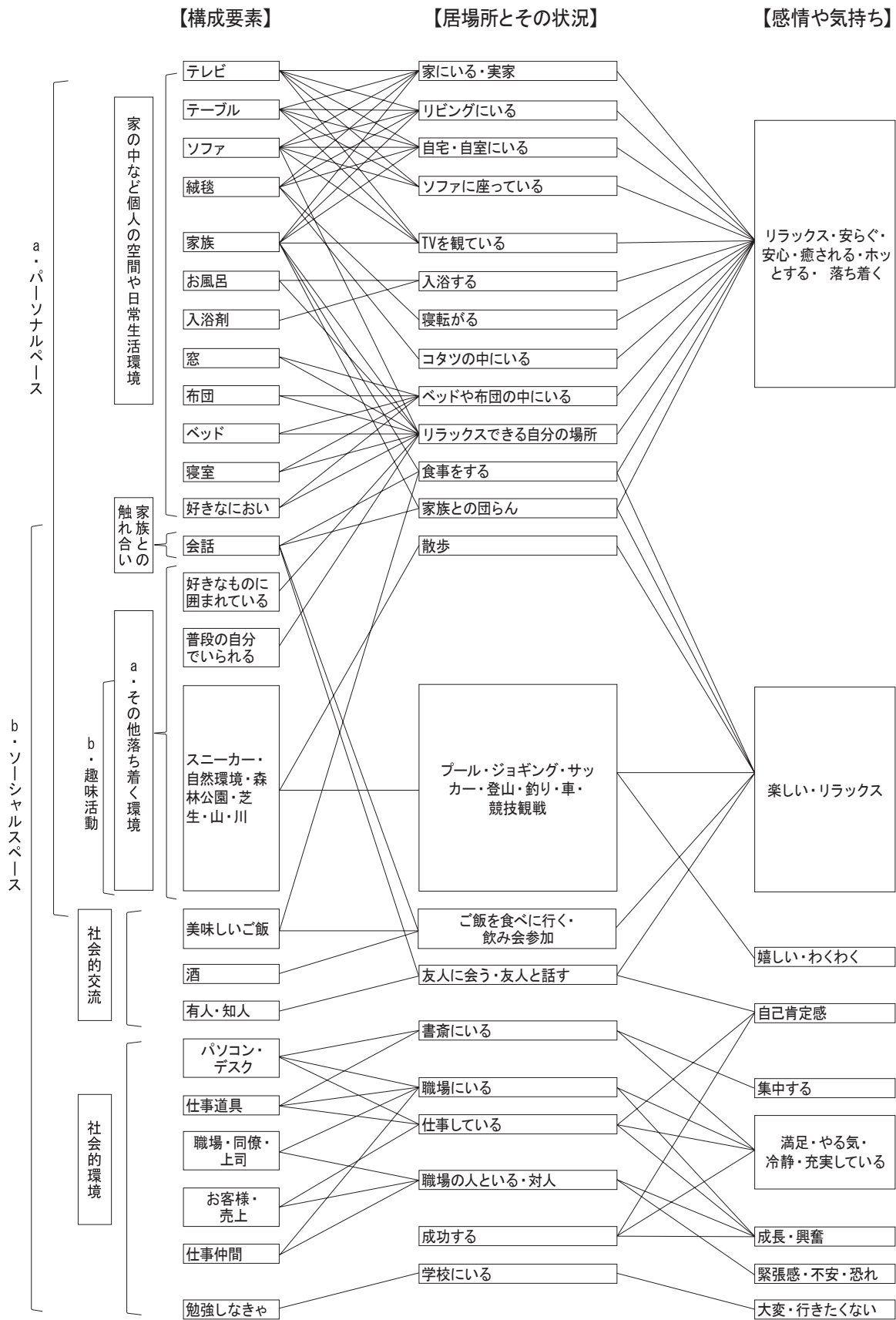


図 3. 居場所の要素とその状況

表 4. 年代別居場所の概要

	家（自室）	実家	親戚・ 祖父母	職場	自然	乗り物	娯楽	健康・ 人と会う他
20代	誰にも見られない、居るだけ、ソファでぼんやり、ベッド、布団、TV	絶対味方、何もしなくて良い	元気な姿を見せる	頑張ろう、楽しいけど苦痛		自動車；スピード感、ワクワク	ゲーム；いつでもどこでも	
30代	帰る場所、家庭（妻と子供）、家族で団欒、落ち着く、ゆったりしている自由な空間			成長、成功、緊張感、楽しい、学生の成長を見ると幸せ			飲み屋、喫煙所	
40代	家族と一緒に、パートナーと素でいられる、家族と共に過ごす時間、触れ合い、安らぎ、寛ぐ、平穏な日常			自分が成長できる場所、充実感、責任、やりがい、気が引きしまる、安定		自動車；仕事で使用	映画館；非日常	
50代	1人で寛ぐ、アロマ、ベッド、パズル、好きなことをする、自宅がある				プール、道路（ジョギング）、山、川、自然の中、公園、散歩、イベント、自由な場			
60代	家族や孫がいる自宅がある、非難されない、自由気まま、家族がいて安心、許される、家庭円満				自然の中での散歩		古い昔のレコードやCD	自分が健康でいられる、友人と会う
70代～	家族と団欒、孫、窓からの眺め死後も変わらず、息子と同居、1人暮らしには不安	故郷を懐かしむ	甥に会う		庭			諸行無常を考える、常に健康である事

2) 年代別居場所の傾向

年代別居場所の結果では年代ごとの特徴的な傾向がみられた。年代別居場所の結果から、いずれの年代も発達段階の特徴とも一致する傾向である。

エリクソン¹⁵⁾は、20歳代では「アイデンティティの確立の時期」であるとしている。本研究では「誰にも見られない自室、ゲーム、TV」などのような個人的な趣味や休息時間を居場所とする傾向にあった。30歳代では「ライフスタイルが確立され、仕事とプライベートのバランスを保たれている時期」であるとし、「プライベートなスペースである家」と「職場環境」および、「サードスペースとも思えるような「居酒屋」などのような場所をあげる傾向にあった。40歳代においては、「社会的責任を果たす役割、家庭・家・家族を大事に思い将来を計画し目標を設定する時期」であると述べており、自宅や職場のほか家族を居場所とする傾向にあった。また50歳代では、仕事や職場より自然の中での趣味活動などアクティブなことを挙げる傾向にあり、「子供も自立し再度自分に戻る過程」と考えられている。さらに、ハヴィガーストが「子供の教育から手が離れ、大人としての余暇活動を充実させる時期」¹⁶⁾と述べていることから結果と一致すると考えられる。60歳代および70歳代以降では、自宅のほか孫や家族との時間、交流、仲間との趣味活動などを挙げる傾向にあり、「自分が健康でいられる」「諸行無常を考える」などと考えているように、「人生の統合の時期、次の世代を担う人を育て自分の老

いを受け入れ、見つめなおし振り返る時期」¹⁵⁾の特徴があると考えられる。

これらのことより、居場所を考える上で各年代の特徴をふまえ、発達段階に応じた環境を提供することが望まれる。

3) 療養環境における居場所の構成要素

「パーソナルスペース」において、被験者の多くが誰にも干渉されない空間として個人が楽しむこと、いつもの場所でリラックスする状況を回答していたことは、川口らが、入院環境において多床室であっても個人の時間や空間を確保できる工夫が大事なこと¹⁷⁾と述べているように、必要な条件であろう。また、「パーソナルスペース」における家族との団らんや、「ソーシャルスペース」における友人との交流などにおいて被験者が、自分が知る親しい人との交流の場面で“安らぎ”や“ゆったり”“ホッとする”という感情で表し、さらに、“自己肯定感”と表現する人もいた。近年病院では個室が増えているが、川口らが「個室での闘病生活の孤独よりは、病気を抱えて入院する者同士の助け合い関係が、大きな支えとなっている」¹⁷⁾と述べていることから、人との交流や自己を肯定的に確認できる場所も療養に必要な要素ではないだろうか。

個人の居場所に必要な要素は、「テレビ」「布団」「ベッド」「本や新聞」「入浴する」「ソファ」「テーブル」「温かい光」などであり、一人でゆっくりとくつろげる

環境であった。これは、渡邊ら¹⁸⁾による病室環境の評価において、広くゆったり出来、プライバシーが保てる空間が良く、さらにテーブルやソファがあることがリラックスできると評価していることと一致するものである。

以上より、療養環境における居場所の構成要素は、プライバシーが保てるくつろげる空間であり、それまでの暮らしの中で馴染んだ「テレビ」「ベッド」「テーブル」「ソファ」「本や新聞」があることが望ましいと考えられる。さらに、生活を支え合える人の存在や親しい人の存在があり、自然に触れる環境があることも要素と考えられる。

例えば、療養環境を考える際、入院患者の発達段階に応じて「パーソナルスペース」および「ソーシャルスペース」の「社会的交流」と仕事ができる環境である「社会的環境」なども整える必要もあるのではないだろうか。同様に、介護者である家族であった場合にも、発達段階に応じた「パーソナルスペース」および「ソーシャルスペース」を充実させ、仕事や人との交流、自然とのふれあいが可能な環境を提供できるように整えることも必要であると考えられる。

4) 研究の限界と課題

今回開発した対話型アセスメントツール「居場所曼荼羅」は、15分～20分程度で実施でき簡便であると考えられる。プレテスト時に得られた課題は概ね改善されたといえるが、棄権に至らないまでも「何を書いて良いのかわからない」「答えづらい」という意見が、一定数あった。「居場所曼荼羅」を用いた記入調査は、「居場所」という極めて個人的なものに関して質問者と対話をしながらその構成要素を明らかにしようとする調査である。そのため、自らの内面に踏み込まれているような印象を与えており、「答えづらい」という意見につながっていると考えられる。このようにプライバシーに踏み込むような側面もあるため、対象者と調査者の関係性が結果に影響したとも考えられる。質問項目に関しては、「想像してください」「どんな感じですか」といった曖昧な表現を用いているため、解釈が難しい部分があるといえる。今後、より明解な教示方法を検討していく必要がある。

5. 今後の展望

今回は療養者が必要とする居場所の探索のためのツールの開発を目的として、健康な一般の人を対象

に実施した。今後は、今回の示唆をふまえて被験者が回答しやすい場の設定や教示、条件を精査して必要がある。条件を設定し調査をすすめていきたい。

6. 結論

人の居場所とは、心身共にリラックスでき、自己の存在価値が見いだされる場所である。療養環境に必要な居場所の構成要素は、「パーソナルスペース」と「ソーシャルスペース」のバランスが保たれていること、さらに、生活を支え合える人の存在や親しい人の存在があることが望ましく、自己を肯定的に捉えることができる環境と示唆された。また、療養者及び介護者の両者にとって心地よい療養環境となるよう、発達段階に応じた環境の調整も必要であると示唆された。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、調査の趣旨を理解し快く引き受け、ご協力いただきました対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) F. Nightingale 著（湯楨ます、薄井坦子訳）：看護覚え書，現代社，東京，2011
- 2) 渡邊生恵，柏倉栄子，杉山敏子：入院患者による療養環境の評価に関する定性的調査，東北大学医療保健学科紀要，17(1):37-47, 2008
- 3) 厚生労働省：「終末期における療養場所，終末期医療の在り方に関する懇談会」2010. <http://www.mhlw.go.jp/bunya/iryou/zaitaku/dl/07.pdf> 2016年10月22日（アクセス日）
- 4) 内閣府：「平成24年版高齢社会白書」2012. http://www8.cao.go.jp/whitepaper/w-2012/zenbun/s1_2_3_03.html 2016年10月28日（アクセス日）
- 5) 内閣府：「平成22年介護保険制度に関する世論調査」2010. <http://www.pref.yamagata.jp/ou/kenkofukushi/090002/kca/anshin-serv/shiryo1-1.pdf> 2016年10月28日（アクセス日）
- 6) 文部科学省：「中央教育審議会初等中等教育分科会第38回議事録」1992. http://http://www.mext.go.jp/b_menu/shing/cyukyo/cyukyo3/shiryo/06042105/001.htm 2016年10月22日（アクセス日）

- 7) 文部科学省：『絆づくり』と『居場所づくり』
国立教育政策研究所，2009 <http://www.nier.go.jp/shido/ieaf/leaf02.pdf> 2016年10月22日（アクセス日）
- 8) 讚井純一郎，乾正雄：レパートリーグリッド
発展手法による住環境評価構造の抽出－認知心理学に基づく住環境評価に関する研究（1），
日本建築学会論文報告集，367：15-22，1986
- 9) トニー・ブザン／バリーブザン（近田美季子
訳）：ザ・マインドマップ，ダイヤモンド社，
東京，pp. 17-18，2013
- 10) 高橋弘明，相馬淳，望月泉：ワークショップ
形式を活用した多職種連携による委員会運営
の試み－マインドマップ手法の応用－，日本
医療マネジメント学会誌 15(4)，pp247-250
- 11) 高橋文徳：マインドマップが学習効果を高め
る要因の検証，尚絅学園研究紀要，自然科学
編 6：pp. 16-17，2012
- 12) 大橋幹夫：「ユングのマンダラと密教の曼荼
羅」－西洋と東洋の深層心理比較，自我と無
我について－，ユング心理学研究会，2005
<https://jung2012.jimdo.com> 2017年1月10日
（アクセス日）
- 13) 河合隼雄：自己．河合俊夫 編，ユング心理
学入門，岩波書店，東京，pp248-267，2015
- 14) B. ベレルソン（稲葉三千男，金圭煥 訳）：内
容分析，社会心理学講座VII，みすず書房，東
京，1957
- 15) B.M. ニューマン，F.R. ニューマン（福富
護 訳）：生涯発達心理学－エリクソンによ
る人間の一生とその可能性－，川島書店，東
京，pp. 347-481，1988
- 16) R. J. ハヴィガースト：人間の発達課題と教
育，玉川大学出版部，東京，pp. 260-284，1995
- 17) 川口孝泰，勝田仁美，櫻井利江：多床室の療養
の場の特性に関する検討－レパートリー・グリッ
ド法によるベッドの位置の思考調査より－，日本
看護研究学会雑誌，19(3)：pp. 13-20，1996
- 18) 渡邊生恵，杉山敏子：一般病床患者と看護師
による療養環境評価の特性，日本看護研究学
会雑誌，35(5)：pp. 117-128，2012